第1章　各　教　科
第1節　国　　語

第１　本指導実践事例集の活用について

１　作成の基本的な考え方

⑴　本資料は、中学校学習指導要領及び埼玉県中学校教育課程編成要領の趣旨を踏まえ、言語の教育としての立場を一層重視し、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付ける学習指導の展開の参考となるよう、実践例を示したものである。

⑵　中学校学習指導要領の国語の目標は、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる」である。この目標を実現するためには、「言語活動の充実」「学習の系統性の重視」「学習活動に即した評価規準の設定」に留意する必要がある。よって、本資料では、これらについての具体的な実践例を示すこととした。

２　取り上げた内容

⑴　概要と趣旨

ア　言語活動の充実

基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究できる言語能力を身に付けさせるために、中学校学習指導要領に示された言語活動例を通して指導事項を指導することが重要である。本資料では、言語活動の充実を図り、国語科の指導を効果的に行うために、学校や生徒の実態に応じた言語活動を工夫するという視点から授業展開例を示した。

イ　学習の系統性の重視

小学校での学習内容を踏まえ、３領域１事項の目標・内容について、各学年で指導する内容を具体化し、学年・単元間の系統性を明らかにした指導計画を作成し、見通しをもって日々の指導に当たることが重要である。本資料においても、学習指導案の形式として「２　生徒の実態と本単元の意図（１）本単元に至るまでの指導の系統」を設定し、本単元において育成すべき国語の能力の系統性を明らかにした。

ウ　学習活動に即した評価規準の設定

生徒の具体的な反応や姿がどのようになっていればよいのかを表した「学習活動に即した評価規準」を設定して、各時間の指導に当たり、学習の達成状況を適切に評価し、その後の指導に生かすことが重要である。本資料では、各評価場面における評価方法や評価結果を踏まえた指導・支援の手立て等について具体例を示した。

⑵　構成

本資料は次の内容で構成した。

事例１　言語活動の充実①　・・・「A　話すこと・聞くこと」の指導事例（第３学年）
事例２　言語活動の充実②　・・・「B　書くこと」の指導事例（第２学年）
事例３　言語活動の充実③　・・・「C　読むこと」の指導事例（第２学年）
事例４　小中連携の充実　・・・「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」（古典）の指導事例（第１学年）
事例５　学校図書館の活用の充実・・・「C　読むこと」を中心とした指導事例（第１～３学年）
事例６　書写の指導の充実　・・・「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」（書写）の指導事例（第１学年）

３　活用に当たっての配慮事項

本資料は、埼玉県中学校教育課程編成要領、同指導資料及び同評価資料と相補するものであり、ともに活用し、学習指導の充実、日々の授業改善を図ることが大切である。

学習指導要領の全面実施を受け、国語科としての今日的課題の解決に資するよう配慮したが、実践に当たっては学校や生徒の実態を踏まえ、創意工夫を加えた上で御活用いただきたい。

第２　実践事例

事例１　言語活動の充実①「Ａ　話すこと・聞くこと」の指導事例（第３学年）

ここでは、言語活動例「イ　社会生活の中の話題について、相手を説得するために意見を述べ合うこと」を通して、主に指導事項「ア　社会生活の中から話題を決め、自分の経験や知識を整理して考えをまとめ、語句や文を効果的に使い、資料などを活用して説得力のある話をすること」を指導する事例を示す。

本事例においては、生徒の実態や単元の目標を踏まえ、ディベートの形式により言語活動を展開する。ディベートは、小グループ内における「ミニディベート」を実施する。生徒一人一人の役割を明確にし、自分の意見を述べ合う機会を設定することで、十分な言語活動の量を確保する工夫を行った。

１　単元名・教材名　　説得力のある意見を述べ合う

２　生徒の実態と本単元の意図

⑴　本単元に至るまでの指導の系統

育成すべき国語の能力 【指導事項（話すこと・聞くこと）】	学　習　内　容	単元・教材名 〈実施時期〉	学習活動と関連する他領域等の指導
・社会生活の中から話題を決め、自分の経験や知識を整理して考えをまとめ、語句や文を効果的に使い、資料等を活用して説得力のある話をすること。【３年ア】	・聞き取りメモの書き方 ・メモの活用 （整理・補強・解説）	「人の話を聞き自分の表現に生かす」 〈３年４月〉	【読むこと】 「情報を編集するしかけ」 ・情報の比較 【書くこと】 「文章名人」 ・文章の形態の選択 ・説得力のある文章の書き方 ・批評文の書き方
・場の状況や相手の様子に応じて話すとともに、敬語を適切に使うこと。【３年イ】	・条件や場に適した話の組み立てや表現の工夫 ・敬語の適切な使い方	「場を踏まえて効果的に話す」 〈３年９月〉	

⑵　生徒の実態と本単元の意図　（一部省略）

自分の考えをその場でまとめて発表したり、相手の意見に対して批判したりすることに苦手意識をもっている生徒が多い。また、相手の話を聞いてメモをとったり、話の内容に対する自分の考え等をその場で書いたりすることが十分にできない生徒もいる。

３年生になると自分の経験や知識を整理して考えをまとめ、語句や文を効果的に使い、資料などを活用して説得力のある話をすることについては既に学んでいる。しかし、場の状況や相手の様子に応じて質問したり、意見を交わしたりする経験が十分であるとはいえない。そこで、ディベートの形式を取り入れ、自分の意見を主張するだけでなく、相手の意見を聞いて、メモしたり質問や反論をしたりして自分の見識を広げ、考えを深められるよう授業を展開したい。本単元では、小グループ内における「ミニディベート」を実施する。生徒一人一人が自分の役割を明確にし、自分の意見を述べ合う機会を設定することで、言語活動量を確保したいと考えている。

３　単元の目標

⑴　相手や場に応じて話したり、表現の工夫を評価して聞いたりして、課題の解決に向けて考えを深めようとしている。　（関心・意欲・態度）

⑵　他の人の意見のよいところを指摘したり、調整の仕方を提案したりしながら、自分の意見を見直したり深めたりすることができる。
（話すこと・聞くこと）

⑶　場の状況や相手の様子に応じて話すとともに、敬語を適切に使うことができる。
（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

【ミニディベートを行っている様子】

4　単元の評価規準や学習活動に即した評価規準

※（　）の部分はAの状況、他はBの状況を示す。

	ア　国語への関心・意欲・態度	イ　話す・聞く能力	オ　言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	・社会生活の中の様々な話題に関心をもち、課題の解決に向けて積極的に話し合い、互いの意見や考えを生かそうとしている。	・他の人の意見のよいところを指摘したり、調整の仕方を提案したりしながら、自分の意見を見直したり深めたりしている。〈ウ〉	・場面や相手に応じて話すとともに、敬語を適切に使っている。〈イ(ア)〉
学習活動に即した評価規準	①興味・関心をもってディベートに取り組もうとしている。 ②自他の質問や反論のよさをとらえ、感想にまとめている。	①相手の話の要点を的確に聞き取り、聞き取った内容を（要約して）メモしている。 ②様々な情報を取捨選択して整理し、自分の意見を述べている。	①場面や相手に応じた（適切な）言葉を選んでいる。 ②敬語を正しく理解し、適切に敬語を用いて話をしている。

5　指導と評価の計画（全４時間）

時	主な学習活動	学　習　内　容	評価規準・評価方法
1	○ディベートの映像資料を視聴し、その形態や流れを理解する。	○ディベートの進め方 ・パネルディスカッション等との違い	アの① ・机間指導による観察
2	○ディベートの準備をする。 ・４人でグループを組む。 ・立場(肯定派･否定派)を決定する。 ・役割(司会・審判)を決定する。 ・情報の確認(分析)と整理をする。	○情報の分析・整理の仕方 ○立論の立て方（フローシート） ○立論の内容 ○反対尋問（予測と対策）	・机間指導による観察 ・フローシートの内容の考察 ・情報の分析と活用
3（本時）	○ミニディベートを２回行う。 ・フローシートに記入する。 ・審判シートに記入し判定する。 ・相手の意見に応じ質問､反論する。	○フローシート活用方法 ○フローシートの内容 ○審判判定シートの活用方法 ○効果的な質問、反論の仕方	イの①②　オの①② ・フローシートの観察 ・審判判定シートの考察 ・ミニディベートの観察
4	○ディベートを振り返る。 ・感想（批評）文を書く。	○感想（批評）文の記述の観点 ・質問や反論の内容、効果	アの② ・感想（批評）文の内容の考察 ・自己評価カードの内容の考察

本単元では、テーマに即した資料を教師が用意し、生徒は、それを活用し情報の分析・整理を行う。

6　本時の学習指導（本時　３／４時）

(1)　目標

・聞き取った内容や表現の仕方を評価して自分のものの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりすることができる。（話すこと・聞くこと）

・場面や相手に応じた言葉を選び、敬語を適切に用いることができる。　（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

(2)　展開

学　習　活　動	学　習　内　容	指導と評価の創意工夫
1　既習事項の確認をし、本時の学習のめあてを知り、見通しをもつ。	○ミニディベートの論題	・ディベートの手順は板書して、生徒が活動中も確認できるようにしておく。 ・フローシートに従い進行させる。 ・前時に教師が根拠となるような資料を数点提供しておく。
（例） ・「小倉百人一首は小学生の時から覚えるべきである」 ・「先生に対する敬語は小学校１年生から使うべきである」		
2　ミニディベートを行う。	・論理的な話の構成　・根拠やデータの活用	・データの示し方や表現を工夫すること

・４人１組の役割分担を確認する。
（司会・審判・肯定派・否定派）
(1)開会する。（１回目）
(2)論題の提示（確認）する。
(3)立論する。　【各２分】
(4)作戦を練る。　【２分】
(5)反対尋問する。　【各３分】
(6)作戦を練る。　【２分】
(7)最終弁論する。　【各２分】
(8)各自でまとめる。　【２分】
(9)判定と判定の理由を聞く。
(10)閉会する。

２回目のミニディベートを、(1)～(10)の流れで実施する。

・説得力のある表現

「よって、～であると主張します。」
「～について説明します。」
「第一に…、第二に…。」
「というのは、～だからです。」

○メモを生かした質問
・意味不明瞭な箇所　・根拠不十分な箇所

〈手立て〉には、生徒がＢ評価に達するために教師が行う指導の手立てとともに、必要に応じて、Ｂ評価に達した生徒をＡ評価の状況に導く手立ても記述する。

〈審判の判定基準〉
・説得するために、根拠を明確にし、工夫をしているのはどちらか。
・相手の意見や考えを踏まえた質問や反論ができているか。

で自分の考えや根拠を主張させる。

評価場面

〈学習活動に即した評価規準〉イ②
〈評価方法〉フローシート内容考察
〈手立て〉
・自分の考えを述べることができない生徒には、フローシートのポイントを示し、発言内容を考えさせる。
・自分の意見を効果的に述べている生徒には、教師の側から予想される反論を示し、考えをさらに深めさせる。

・審判は判定シートに記入する。
・まとめの時間（８）に、審判には「判定結果の理由」を書かせ、最後に発表させる。
・２回目に入る前に指導助言をする。

フローシート1 論題「小倉百人一首は小学生の時から覚えるべきである」

司会　・（肯定派）・　否定派　　氏名（ ○○　○○ ）

氏名	①立論（2分）	②否定派質問・反論 肯定派回答（3分）	③肯定派質問・反論 否定派回答（3分）	④最終弁論（2分）
肯定派 (○○○○)	・楽に覚えられる。 根拠1：「記憶力」 「古典学習に役立」。 根拠2：国語教科書 結論：小学生から覚える方が絶対にいい。	・今意味がわからなくてもいい。 後でわかればいいものもある。 根拠：江戸時代の寺子屋「論語」 ～暗唱の効果は誰もが認めるところ ・楽しく覚えることもできる。 例：家族でカルタ遊び（絆深まる）	・本当に「かわいそう」なのか？ 事例：ある小学校の校長先生の話 ～インターネット「学校だより」 →暗唱する子ども達の笑顔 百首全部覚えた子も２０人近い。 ・百人一首覚えても校庭で遊べる。	・中学は忙しい。 ・小学生が時間をかけて覚えて何が悪い！ ・短歌のリズムや美しい言葉は小学生にも伝わる。大切な文化だ。
		⇑	⇓	
否定派 (○○○○)	・小学生がかわいそう。 ・小学生はもっと校庭で遊ぶべき。 ・百人一首覚えて小学生の役に立つのか疑問 結論：百人一首不必要	・小学生に理解できないのでは？ 根拠：恋の歌が多い～６割 理解できないのに覚えるのは苦痛 ~~→時間もかかり、ムダになるはず~~ 中学に入ってからで十分 ~~強制的な教育は子どもらしさを奪う。~~	・自分は百首覚えたのか。 ・覚えると言われて辛くなかったか。 ・小学生が覚えて何になる。 ・中学で覚えればそれでいい。 ・「学校だより」は一例にすぎない。 ・なぜ「小倉百人一首」？ ・他のものでもいいのではないか？	古典学習に必要なら、「竹取物語」でもいい。 恋の歌が６割と多い →肯定派何もふれない。 よって、恋の歌が多い百人一首は小学生には不適当である。

※有効な意見・質問には（　）をつける。　気になる部分は～～～をつける。　解消したら＝＝＝を引く。

審判判定シート１　論題「小倉百人一首は小学生の時から覚えるべきである」

審判氏名（　○○　○○　）

流れ	観点		肯定派	否定派	判定結果の理由
立論	根拠の明確さ・説得力		A	B	立論では肯定派が根拠を二つ挙げていたが、否定派は質問と感情的な意見にすぎなかった。
反対尋問	質問	的を得た有効な質問 有効な質問	A	A	質問に対し、互いに回答しない部分もあったが、根拠となる事例が用意されていて感心した
	回答	質問に対し明確な答え 立論の補強	B	A	回答では肯定派は事例を挙げ対応。しかし、否定派の回答からたたみ込むような質問によって、肯定派の主張が揺らいだと思う。
最終弁論	相手の主張をふまえた主張・説得力		C	A	最終弁論で否定派は「恋の歌が多い」ことを前面に出し、「竹取物語」を例に、うまく自分の主張をまとめた。よって、否定派の逆転勝ち
総合評価				○	

※ＡＢＣの３段階で評価する。総合評価は判定結果の○をつける。

事例２　言語活動の充実②「Ｂ　書くこと」の指導事例（第２学年）

ここでは、言語活動例「イ　多様な考えができる事柄について、立場を決めて意見を述べる文章を書くこと」を通して、指導事項「イ　自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にして、文章の構成を工夫すること」を指導する事例を示す。
本事例においては、「新聞」を主な教材とする。まず、新聞の「投書欄」の文章を読み、意見文の特徴を捉えさせた上で、自分の立場や考えを明らかにし構成を工夫した文章を書かせる学習活動を展開する。生徒が書いた文章を新聞社に投書するなど、活動の目的や条件を明確にすることで、単元を貫く言語活動が行われるよう工夫をした。

１　単元名・教材名　　新聞投書に対して意見を述べよう

２　生徒の実態と本単元の意図

⑴　本単元に至るまでの指導の系統（省略）

⑵　生徒の実態と本単元の意図（一部省略）

本単元では、社会生活の中の様々な問題を取り上げている新聞を学習に活用することとした。様々なテーマで書かれた意見が掲載されている新聞の「投書」から、根拠となる事実と主張を捉え、主張について賛成か反対かなど自分の立場を決め、自分の考えの中心や主張を明確に文章化できるようにさせたい。また、生徒が書いた文章を新聞社に投書することを伝え、単元全体を通じて意欲を継続させたいと考えている。

平成23年３月には、東日本大震災が発生し、震災に関わる情報や被災された方々の状況や心労、それを見守る人々の思いなどが新聞でも報道された。生徒も、その記事を読み、様々なことを感じ、考えていたようである。今回の授業でも、震災への人々の思いを可能な限り取り上げ、関心をもたせて学習を進めさせたい。

小学校においても新聞を教材とした学習は多く実施されている。小中の連携を図り、新聞を教材とした学習を系統的に進めることで、新聞の読み方を学び、情報を正しく理解し、主体的な読み手を育てることができると考えられる。小学校の学習内容を踏まえ、学習のねらいに沿って新聞を教材として授業を進めることで、社会生活で生きてはたらく力を身に付けさせたい。

以下は、新聞を教材とした「書くこと」の学習活動の例である。

小学校では、編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むことを学習している。

学　年	新聞を教材とした「書くこと」の学習活動の例
小学校６年	教材〈投書〉 ・複数の投書を読み比べ、説得力のある文章の書き方を学ぶ。 ・説得するための技法を生かして、学校生活における提案を題材とした意見文を書く。
中学校１年	教材〈コラム〉 ・新聞の「コラム」を活用し、内容を理解した上で、自分の感想や考えをまとめる。 ①コラムを読む。コラムスクラップを作る。　②語句の意味を理解する。 ③段落ごとに要約する。④筆者の考えを理解し、自分の感想や考えをまとめる。
中学校２年	教材〈投書〉　⇨　本事例
中学校３年	教材〈社説〉 ・複数の新聞記事を読み、事実を正しく理解し、自分で社説を書き、考えを述べる。 ①社説を読むことに慣れる。社説スクラップを作る。②各新聞社の記事と社説を読み比べる。 ③自分が論じたい新聞記事を選び、関連する記事を探す。④ワークシートに主張と根拠をまとめる。 ⑤800字程度の社説を書く。（見出し、常体）⑥社説を互いに読み合う。

３　単元の目標

⑴　自分の立場や意見が読み手に伝わるように、根拠を明らかにして文章を書こうとしている。(関心・意欲・態度)

⑵　テーマについて、自分の立場や意見を明らかにして文章を書くことができる。(書くこと)

⑶　意見文の文章構成を理解し、適切な語句を用いることができる。(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

4　単元の評価規準や学習活動に即した評価規準

	ア　国語への関心・意欲・態度	ウ　書く能力	オ　言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	・自分の立場や意見が読み手に伝わるように、根拠を明らかにして文章を書こうとしている。	・自分の立場や意見が効果的に伝わるように、根拠を説明したり具体例を用いたりして文章を書いている。〈ウ〉	・読み手に自分の考えやその根拠などが伝わるように文章の展開を工夫している。〈イ　(ｵ)〉
学習活動に即した評価規準	①文章を書くために必要な方法や情報を集めようとしている。 ②説得力のある文章を書くために自分の主張や立場を決め、読み手にとって分かりやすい構成にしようとしている。	①意見と根拠を明確にして文章を書き、効果的な文章構成をしている。 ②自分の意見について分かりやすい説明や具体例を加え、表現しようとする内容にふさわしい語句を選んで文章を書いている。	①自分の主張や話題、立場にあった文章の書き方を工夫している。

5　指導と評価の計画（全５時間）

時	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1	○学習計画を確認する。 ○新聞の投書欄について学ぶ。 ○職場体験をテーマとした中学生の投書を取り上げ、「投書スクラップ」の作り方を学ぶ。	○学習計画 ○新聞の投書欄の特徴 ・「投書」とは実際の出来事を根拠として、自分の意見を短い文章でまとめたものであること ○スクラップの作り方 ・一週間に一つの投書をスクラップする。 ・投書を切り抜き、「書き方の工夫」「要旨」「自分の考え」等を書く。	アの① ・スクラップシートの記入内容の確認
2 3	○中学生の「節電」に関する投書を読み、自分の意見を述べる文章の効果的な書き方を学ぶ。	○効果的な投書の書き方 ・「導入・展開・反論・まとめ」の４段落構成 ・見出し文の工夫・具体的事例・文末	アの① ・机間指導による観察

【効果的な書き方を学ぶ教材例】

すべて「節電」でよいのか　　中学生による投書から

国の節電と省エネの呼びかけのもとに、少しでも電気の使用を減らそうと、日本の国民はみな努力してきた。被災された方々のことを考えれば、少しでも自分のできることを協力して行うのは当然だと思う。しかし、「節電は当然」と言っても、最近の社会を見ると、少し方向性がずれてきているように感じる。節電は大事だが、電気を使うこと自体が悪いことのような雰囲気を感じることがある。

導入（問題提起）ある話題を取り上げ、自分の立場（賛成・反対）をはっきりさせる。

先日、ある病院に行くと、「節電のため照明を落としています」と掲示されており、病院の待合室や廊下は薄暗くなっていた。目の悪い方やお年寄りには案内板は読みにくいだろうし、歩きにくいだろうと感じた。また、病院に行くために降りた、電車の駅では、節電のためにエスカレーターが止められていた。階段を利用せざるを得なかった人たちの中には、赤ちゃんを抱いたお母さんや、お年寄りの方、大きな荷物を持った方もいて困っていた。

展開　提示した問題に対する根拠となる事例や体験をあげる。

確かに節電意識は大切だ。みんな「節電」の重要さは十分理解しているから不満を口にしない。でも、危険を感じることや、生活に不便を感じてしまうようなことまで「節電」という名のもとに、電気を消す必要があるのだろうか。

反論　予想される反対意見や別の見方をあげて反論する。

＊確かに～。しかし～。　＊もちろん～。しかし～。＊一方～という見方もあるが、

節電とは本来必要でないものや無駄なものをなくし、効率的に電気を使うことだと思う。何でもかんでも電気を消すのではなく、これからは、節電してよいものと、しない方がよいものとを、しっかりとわけるべきだと思う。

まとめ　導入であげた内容と、照応させて、自分の考えや意見をまとめ、主張を提示する。

	○書き方の工夫点、投書の要旨をまとめる。 ○同テーマに関する自分の意見、根拠をワークシートにまとめる。 ○同テーマで、４段落構成で400字程度の文章を完成させる。 ○グループで読み合い、相互評価を行い、優れた点、工夫すべき点について全体で共有する。	1 効果的な見出しが工夫されているか。 2 ４００字程度の文章にまとめられたか 3 「導入・展開・反論・まとめ」の４段落構成か 4 具体的根拠が述べられているか 5 具体的根拠の書き方の工夫点はどこか 6 意見が明確に書かれているか 7 説得力のある文章か。 8 投書に対するあなたの意見と理由を書きなさい。	ウの①　オの① ・完成作品確認 ・相互評価表確認
4	○中学生の投書「被災地で示した歌の真の力」を取り上げて、筆者の主張を読み取る。 ○筆者の主張に対する自分の意見をまとめる。 ○中学生の意見に対して「投書」する文章を書く。 ○グループで読み合い、相互評価を行い、優れた点、工夫すべき点について全体で共有する。	○要旨、主題 ○自分らしい意見と根拠をはっきりとさせた論理的な文章 ・４段落構成で400字程度の文章 ○相互評価の観点 ・「書き方」４段落構成 ・「内容」意見、根拠 ・「書き方」見出し、具体的事例、文末	アの②　ウの① オの① ・完成作品の確認 ・相互評価表の確認
5	○東日本大震災に関わる、中学生、高校生が書いた四つの投書を読む。 ○東日本大震災をテーマに「今、自分たちにできること」を考えて投書を書き、実際に新聞社に送る。	○投書のテーマ ・「被災地から学ぶことの大切さ」 ・「当たり前に感謝して生きる」 ・「できることを探し行動したい」 ・「それでも私は頑張る」 ○自分らしい意見と根拠をはっきりとさせた論理的な文章 ・４段落構成で400字程度 ・効果的な見出し、具体的事例	アの②　ウの① オの① ・完成作品の考察

【生徒作品例】

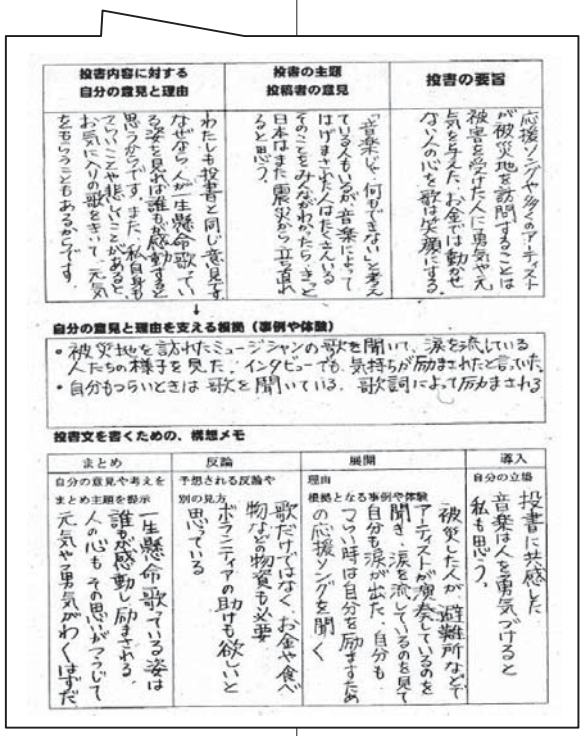
音楽が与える勇気　　二年女子

「被災地で示した歌の真の力」を読み、私も同じことを感じた。それは、音楽には人を勇気づける力があるということだ。

被災された方々が、被災地を訪れたミュージシャンの歌を聞き、涙を流している姿をテレビで何回も見た。被災したわけではないが、自分もなぜか涙が出てしまうこともある。私自身も辛いことがあるとお気に入りの歌を聞き、一緒に歌って自分を励ます。

もちろん、被災された方にとってはお金や食べ物、家といった物も必要だと思う。ボランティアなどの助けも必要だろう。でも、今回の悲しい体験は、物や援助だけでは乗り越えられない程の深い心の傷を残したのだと思う。

心の傷をいやすのは心に直接訴えかける熱い歌声だ。歌声というより、ミュージシャンの熱い思いなのかもしれない。歌に込められた思いが心に届くからこそ、人は励まされ、勇気がわくのだ。



投書内容に対する自分の意見と理由	投書の主題 投稿者の意見	投書の要旨
わたしも投書と同じ意見です。なぜなら、「一生懸命歌っている姿を見ては誰もが感動すると思うからです。また、私自身もつらいことや悲しいことがあると、お気に入りの歌をきいて、元気をもらうこともあるからです。	「音楽じゃ、何ができないと考えている人もいるが、音楽によってはげまされた人は大ぜいいる。そのことをみんながわかったらきっと日本はまた震災から立ち直れると思う。	応援ソングや多くのアーティストが被災地を訪問することは被害を受けた人に勇気や元気を与えた。お金では動かせない人の心を歌は笑顔にする。

自分の意見と理由を支える根拠（事例や体験）

- 被災地を訪れたミュージシャンの歌を聞いて、涙を流している人たちの様子を見た。インタビューでも、気持ちが励まされたと言っていた。
- 自分もつらいときは歌を聞いている。歌詞によって励まされる

投書文を書くための、構想メモ

まとめ	反論	展開	導入
自分の意見や考えをまとめ主題を提示 元気や勇気がわくはずだ。人の心もその思いがつづいて誰もが感動し励まされる。一生懸命歌っている姿は	予想される反論や別の見方 ボランティアの助けも欲しいと思っている。歌だけではなく、お金や食べ物などの物資も必要	理由 根拠となる事例や体験 つらい時は自分を励ますための応援ソングを聞く。自分も涙が出た。自分も聞き、涙を流しているのを見て被災した人が避難所などでアーティストが演奏しているのを	自分の立場 投書に共感した 音楽は人を勇気づけると私も思う。

事例３　言語活動の充実③「Ｃ　読むこと」の指導事例（第２学年）

ここでは、言語活動例「ア　詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流すること」を通して、指導事項「イ　文章全体と部分の関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること」を指導する事例を示す。
本事例においては、小説を読む観点（「小説を読むための技・コツ集」）を巡り、グループで考えを交流する学習活動を設定した。国語科の学習内容を生徒に自覚させ、学習内容の習得・活用を図る工夫がなされている。

１　単元名・教材名　　小説を読み味わおう

「オツベルと象」（宮沢賢治）「夏の葬列」（山川方夫）「形」（菊池　寛）

２　生徒の実態と本単元の意図

⑴　本単元に至るまでの指導の系統

育成すべき国語の能力 【指導事項（読むこと）】	学　習　内　容	単元・教材名 ＜実施時期＞	学習活動と関連する他領域等の指導
・場面の展開や登場人物等の描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。 【１年ウ】	・登場人物の心情や行動、情景描写 ・特徴的な表現（擬声語・擬態語・比喩表現）	「オツベルと象」 ＜１年５月＞	【話すこと・聞くこと】 ○読み取りディスカッション ・テーマの設定 ・根拠となる表現 【書くこと】 ○ブックレポート ・主張と根拠の関係
・文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと。【１年エ】	・文章の構成や展開 ・情景描写、心情描写	「少年の日の思い出」 ＜１年 10 月＞	

⑵　生徒の実態と本単元の意図（一部省略）

生徒は本単元に至るまでの学習の成果として、優れた文章表現に着目し、その意味や効果を考える力を身に付けてきたが、次の展開を暗示するような表現の工夫や文章全体の中で果たす役割等を捉えることは苦手とする傾向が見られる。

そこで、指導に当たっては、教材「オツベルと象」（中１）を通して身に付けた学習内容を中心教材「夏の葬列」で活用し、さらに教材「形」で学習を深めるという単元構成とした。小説を読む観点を生かして「『夏の葬列』後日談」を書くことによって、書くことを通して読み、文章表現の工夫に着目する力を定着させたい。「形」を教材とした学習においては、既習内容を踏まえ、伏線となる表現やその効果について考えさせる学習活動を展開したい。

３　単元の目標

⑴　物語の内容や表現の仕方について感想をもち、交流して考えを深めようとしている。　（関心・意欲・態度）
⑵　登場人物の言動の意味や描写の効果等を考え、表現の特徴に注意して読むことができる。　（読むこと）
⑶　描写の仕方や比喩の用い方等について理解し、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。
（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

４　単元の評価規準と学習活動に即した評価規準

※（　　）の部分はＡの状況、他はＢの状況を示す。

	ア　国語への関心・意欲・態度	エ　読　む　能　力	オ　言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	・物語の内容や表現の仕方について感想をもち、交流して考えを深めようとしている。	・感想を交流するために、物語の構成や展開、描写や比喩等の表現について、具体的な部分を取り上げて考えをまとめている。〈ウ〉	・語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意して読み、多様な語句についての理解を深め、語彙を豊かにしている。〈イ(ｲ)〉
学習活動に即した評価規準	①特徴的な表現の意味や効果を（意欲的に）考えようとしている。 ②文章表現を根拠に自分の考えをもち、（積極的に）交流して深めようとしている。	①情景描写や比喩表現が、話の展開や登場人物の考え方にどのように関わっているか考えをまとめている。 ②登場人物の心情の変化を根拠となる表現を基に読み取っている。 ③物語の結末に至る伏線となる表現とその効果について（作品の特徴を踏まえて）考えをまとめている。	①抽象的な概念を表す語句の意味や用法を理解している。 ②文章中の多義語や慣用表現、比喩表現、人称代名詞の書き分け等に注目し、文脈を踏まえて理解している。

5　指導と評価の計画（全９時間）

時	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1	○「オツベルと象」の学習を振り返り、学んだことを整理する。	・情景描写や比喩表現の効果的な使い方 ・直喩表現（「砂漠の煙のようだ」「嵐のように」「花火みたいに」） ・口調、言葉遣い（「たいしたもんだ。」「万円以上もうけるぜ」） ・擬態語（「ぎょっと」「がたがた震え出す」「顔をくしゃくしゃにして」） ・擬音語（のんのんのんのん、パチパチ、グララアガア）	エの① ・発言の様子や態度の観察
2・3・4・5	○「夏の葬列」を読み、主人公の気持ちの変化を文章表現を根拠に心情曲線にまとめる。 ○班の意見をまとめる。 ○各班の発表内容を吟味しながらクラスの心情曲線を作成する。 資料１	・特徴的な表現の意味や効果（「化石したように」「呼吸を忘れる」「奇妙な喜び」） ・心情表現に着目する読み方（「一つの幸福に化す」「有頂天」「軽薄な口調」） ・根拠となる表現（「埋葬」「封印」「追放」「足どりをひどく確実なものにしていた」） ○隠喩表現の意味や効果（「石」「大きく白い物」「この傷」）	アの①　エの② ・ワークシートによる考察 アの②　エの①　オの① ・ワークシートによる考察 ・発言の様子や態度の観察 ・発表内容の考察
6・7	○「夏の葬列」の続き文を書く。 ○班で読み合い、推敲して清書する。 ○続き文を発表する。 資料２	・情景描写や比喩表現の効果的な使い方 ・情景描写（「芋の葉を、白く裏返して風が渡っていく」「海の音が耳にもどってくる」） ○人称代名詞（「彼」「ぼく」「おれ」）や記号表現（「―」「！」「？」「……」）の使い方	エの①　オの② ・ワークシートによる考察 ・発言の様子や態度の観察
8・9	○「形」の面白さを見付け、班で話し合う。 ○「形」の描写や伏線となる表現、構成の工夫を全体で話し合う。 ○小説を読む観点を整理し、「技・コツ集」を作成する。	・根拠となる表現（「戦場の華」「高らかに笑った」「後悔」「脾腹を貫いていた」） ○伏線となる表現に着目する読み方（「会心の微笑」「びくともしない」「勝手が違う」「必死の力」） ○文末表現、一文の長さの効果	アの②　エの③　オの② ・ワークシートによる考察 ・発言の様子や態度の観察 ・発表内容の考察

6　学習指導の展開　<省略>

＜年間を通した単元構想の例＞

※本実践

	主な学習活動		活動のねらい	学習過程
２年（１学期）	小説　「オツベルと象」の復習	「小説を読むための技･コツ集」づくり（※以下「技･コツ集」）	既習の学習内容の確認・整理（基礎的な知識・技能の習得）	習得
	小説「夏の葬列」を読む。「夏の葬列」続き文を書く。	「技・コツ集」の活用・改善	習得した基礎・基本の活用 活用できた学習内容の評価	↓
	小説「形」を読む。		他の作品で基礎・基本の活用	活用
２年（２学期）	小説「走れメロス」を読む。 小説「走れメロス」を語り手をかえて書き直す。	「技・コツ集」の活用・改善	他の作品で基礎・基本の活用 活用できた学習内容の評価	↓
２年（３学期）	※他の小説を読む。 「三冊ブックトーク」を行う。	「技・コツ集」の活用・整理 →３年生での活用	課題を見出し探究	探究

資料１　＜指導上の留意点＞

⑴　「オツベルと象」の復習で整理した小説の工夫や面白さを、「小説を読むための技・コツ集」としてまとめ、「夏の葬列」で新たに発見したものを加えて修正する。（「●」は追加された観点、「◎」はこの教材で特に学ばせたい観点）

⑵　「夏の葬列」の続き文を創作する。「（　）年後」を各自が設定し、修正した「小説を読むための技・コツ集」を参考にして文章を考える。机間指導において、書き途中の作品の工夫を紹介したり、書けない生徒への助言をしたりする。

⑶　自分の作品の工夫を付箋紙に書き、班で下書きを読み合う。他者のコメントや作品を参考に推敲する。教師は机間指導を行い、優れた工夫の価値について全体に問いかけ、学び合いを深めさせる。

⑷　友達のプリントやもらったコメントを参考に下書きを推敲し、清書の発表を通して学び合う。

＜学習内容を「小説を読むための技・コツ集」としてまとめた例＞

小説を読むための技・コツ集
【二年一組６／23版】

◇**比喩（たとえ）技**
●直喩（まるで砂漠の煙のようだ、花火みたいに化石したように）
◎隠喩（石、大きく白い物、柔らかく重い物）
●擬人法（棺の抱きしめている沈黙）
・数字（六寸くらいのビフテキ）
・大きさ（そうきんほどあるオムレツ）
●色（赤い竜の目、真っ黒になってほえだした、芋の葉、白い物）
・擬音語（のんのん、グララアガア）
・擬態語（ぎょっと、ガタガタふるえだす、ぼしゃぼしゃ暗くなり）

◇**語り手技**
・口調（自慢げな話し方「～だぜ」「百姓ども」）
・独り言（「どういうわけで来たかって？」）
●文末表現（「～していた」「～ている」「だ」）
◎視点変化（彼・ぼく・おれ）

◇**想像（イメージ）技**
・表情（顔をまるっきり真っ赤にして）
・感情表現（白象はさびしく笑って）
・会話文（「こいつはなかなかうるさいねえ。パチパチ顔へ当たるんだ。」）
●短文（艦載機に襲われる緊迫感）
●遠回し（「悲鳴を彼は聞かなかった」）
●無言（ショックの大きさを表現）
◎記号（「―」「！」「？」「……」）
●対比（「芋の葉・風」「よく晴れた空が青く～」←→主人公の心情）

◇**構成技**
・場面変化（「おや、川へ入っちゃいけないったら」）
●回想（濃緑の葉を重ねた～）
●クライマックス（主人公が安心しきった直後にショックを受ける）

「オツベルと象」「夏の葬列」で学習し、整理してまとめた小説を読む観点を、続き文を書く観点として使用することによって、学んだことを自覚し、活用する場とする。

これまでの学習で学んだことを生かし、隠喩、色彩表現、語り手の文末表現、対比表現などを工夫して続き文として表現している。

〈清書例〉

最初に「彼は芋畑に向かう途中だった。」とあって、途中で「それでも今芋畑に向かっているのは」となっているのが、文のつなげ方が上手だなあと思いました。

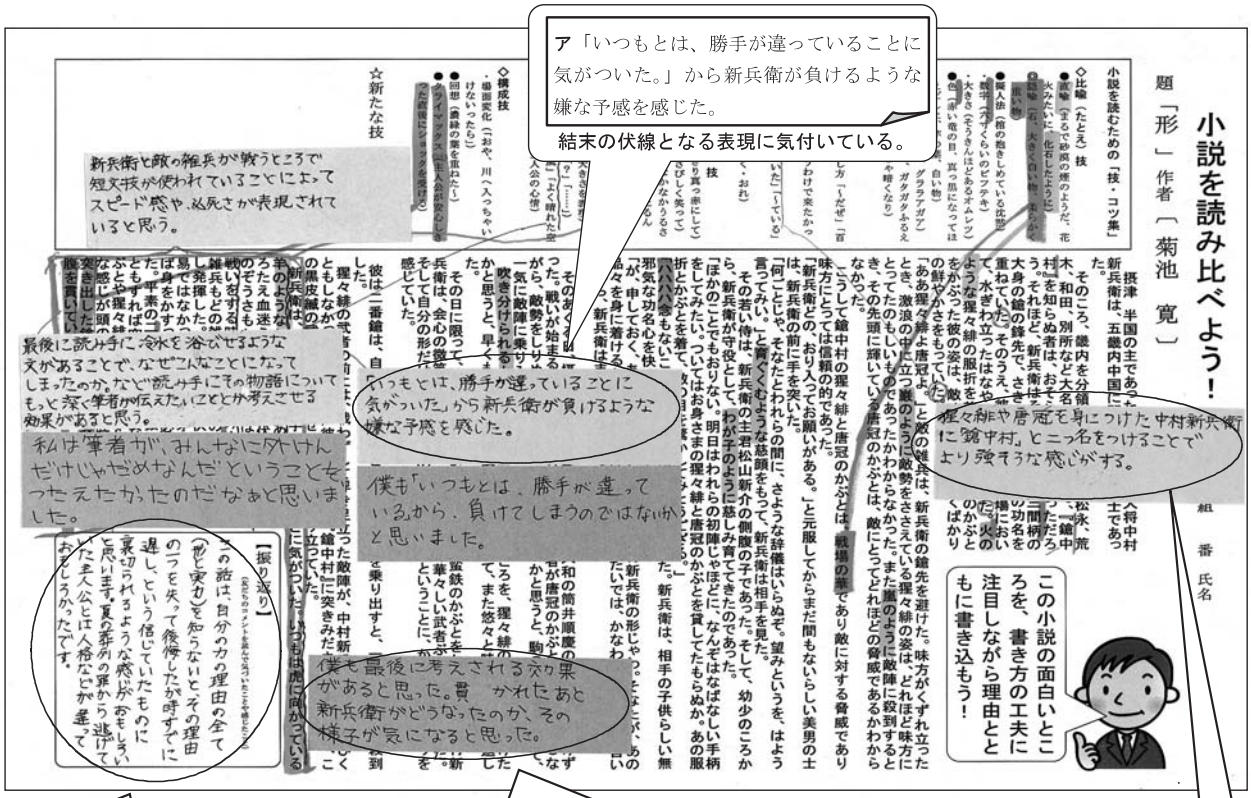
同じ班の人は、主人公の迷い悩む気持ちを説明している語り手の文章の工夫に注目している。

〈下書き例〉

資料2　＜指導上の留意点＞

⑴「オツベルと象」「夏の葬列」と「形」を比較し、同じ表現の工夫を見付けて線を引き、発表する。（既習内容の確認）
⑵「形」の面白いところ、書き方の工夫を見付け、文中の言葉を使って具体的なよさを付箋紙に書く。
⑶　同じ班の人とワークシートを読み合いながら、その人が見付けたよさについて付箋紙にコメントを書き、話し合う。
⑷　班ごとの活動をしている際、教師は机間指導を行い、新たな観点に気付いているコメントを紹介する。例えば、

ア を取り上げ、新兵衛が負ける伏線となる表現が他にないか問いかけ、発言した生徒のよさを称賛する。
イ を取り上げ、前半部分がかぶと等の形の描写が中心なのに対し、後半はどうかと問いかける。（→新兵衛の心情描写が中心）
ウ を取り上げ、どこがクライマックスかを話し合う。（→新兵衛が脇腹を貫かれたあとを省略している結末部分）
エ 学習の振り返りを行う。他者からのコメントや話合い等を通じて、新たに気付いたことや考えたことを書く。



エ この話は、自分の理由の全て（形と実力）を知らないと、その理由の一つを失って後悔したが時すでに遅し、という信じていたものに裏切られるような感じがおもしろいと思います。夏の葬列の罪から逃げていた主人公とは人格などが違っておもしろかったです。

形と実力との関係を見つめ直し、夏の葬列と比較しながら作品の面白さを振り返っている。

ウ 僕も最後に考えさせる効果があると思った。貫かれたあと新兵衛がどうなったのか、その様子が気になると思った。

他者に反応することによって、結末のクライマックスに注目している。

イ 猩々緋や唐冠を身につけた中村新兵衛に「鎗中村」と二つ名をつけることで、より強そうな感じがする。

前半の形を中心とした描写に注目している。

＜小説を読むための技･コツ集（３年４月版）＞

小説を読むための技・コツ集
【三年四月版】

◇登場人物の気持ち
・主人公の気持ち（気持ちの変化）
・登場人物の気持ち
・「会話文」に込められた気持ち
・色彩表現（色による心情表現）
・省略法（無言による心情描写）
・婉曲表現（遠回しな言い方）

◇情景描写
・情景と登場人物の心情との関連
・二重の言葉の意味
・比喩表現―直喩（～みたい・～ようだ）
　　隠喩（「石」など）
・擬声語、擬態語
・象徴的な言葉（夏・芋の葉など）
・対比表現
・短文表現（スピード感など）
・数値、大きさ

◇話の展開・構成
・登場人物の行動の理由
・場面の変化
・山場（クライマックス）
・伏線となる表現
・過去（思い出）

◇作品のテーマ（主題）
・作者の主張
・題名の意味
・結末
・登場人物の性格、生き方

◇文字の表現方法
・記号（……　――　！　？　など）
・文末表現（～た・～だった）
・人称表現（ぼく・彼・自分・俺など）

◇語り手
・口調（話し方、語尾の表現）
・立場（登場人物に対する見方）

事例４　小中連携の充実　「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」（古典）の指導事例（第１学年）

ここでは、小中学校間のつながりを円滑にし、古典に親しむ態度を育成する事例を示す。学習指導要領改訂により、伝統的な言語文化に小学校低学年から触れ、生涯にわたって親しむ態度の育成が重視された。また、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設されたことで、小学校から高等学校までの指導の系統性が明確になった。
本事例では、小学校での学習内容を踏まえた上で、口語訳を効果的に活用し、古文の表現から登場人物の人物像を捉える学習活動を展開する。

小学校の古典指導について　－「埼玉県小学校教育課程指導実践事例集」より　－

小学校高学年では、親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読することや古典について解釈した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ることについて学習する。「埼玉県小学校教育課程指導実践事例集」においては、教材（「竹取物語」「枕草子」「平家物語」）の音読を通して、古文独特のリズムが楽しめるような事例や昔の人と自分たちとのものの見方や感じ方を比べ、共通点や相違点に気付けるようにした事例を紹介している。

１年生における古典指導の流れについて

中学校古典の入り口である第１学年において、例えば、以下のような流れで指導し、古典に親しむ態度の育成につなげたい。本事例では、小学校の事例と同じ教材である「竹取物語」について、生徒自身の感想から学習課題を設定し、課題の解決を図る過程で、学習を深めさせ、生徒の興味・関心を喚起する工夫を行う。

【導入】段階
・「語源」「昔話」などから古典が身近な存在であることに気付かせる。
興味・関心を抱く

→ 【基礎・基本の定着】段階
・古典を学ぶ上で必要な知識を習得させる。（音読、語句について）
リズムをつかむ
古典特有の言葉に気付く

→ 【発展】段階
・個人の感想から設定した学習課題を解決させ、古典学習に対して深まりをもたせる。
自分の興味・関心から古典の世界に迫る

→ 古典に親しむ態度

１　単元名・教材名　　かぐや姫の人物像に迫ろう　－「竹取物語」－

２　生徒の実態と本単元の意図

⑴　本単元に至るまでの指導の系統

育成すべき国語の能力 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】	学　習　内　容	単元・教材名 ＜実施時期＞	学習活動と関連する他領域等の指導
・親しみやすい文語調の文章について内容の大体を知り、音読すること。 ・古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること 【小学校第５学年及び第６学年ア（ア）（イ）】	・自分の思いが伝わるような音読の表現 ・昔の人のものの見方・感じ方 ・時間の経過による言葉の変化	「伝統文化を楽しもう」 ・伝えられてきたもの ・狂言「柿山伏」他 〈６年・７月〉	【読むこと】（１）ア ○楽しむ～詩の朗読会～「まどさん　こんにちは」 ・自分の思いや考えや思いが伝わるように音読や朗読をすること。

⑵　生徒の実態と本単元の意図

中学校１年生で学ぶ古典は、生徒にとって、小学生で学んだ古典との「再会」になる。新鮮な気持ちで抵抗感なく古典と「再会」させたい。導入では生徒の興味を喚起するため、また音読の練習を繰り返し行うために、プレゼンテーションソフトをスクリーンに映し、授業を行う。ともすると「難しい」と感じてしまう古典教材に対し、コンピューターなどのITを使い、視覚に訴えることで意欲的に取り組ませたいと考えた。

３　単元の目標

⑴　古典の文章に興味や関心をもち、進んで作品を読もうとしている。（関心・意欲・態度）

⑵　古文の表現の仕方や文章の特徴に注意し、古人のものの見方や考え方を理解し、それに対する自分の考えをまとめ、ものの見方や考え方を広げることができる。（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

⑶　歴史的仮名遣い、語句や語彙等、古典を読むための基礎的な事項を身に付け正確に読むことができる。（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

4　単元の評価規準と学習活動に即した評価規準

※（　　）の部分はAの状況、他はBの状況を示す。

	ア　国語への関心・意欲・態度	オ　言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	・古典に興味や関心をもち、進んで古典の学習に取り組もうとしている。	・古文の表現の仕方や文章の特徴に注意し、古人のものの見方や考え方を理解し、それに対する自分の考えをまとめ、ものの見方や考え方を広げている。 ・歴史的仮名遣い、語句や語彙等、古典を読むための基礎的な事項を身に付け正確に読んでいる。
学習活動に即した評価規準	①言葉遣いや仮名遣いの違い・古文のもつリズムなどに興味や関心をもち、進んで古文を読もうとしている。 ②他の場面の文章を読み、積極的に課題を解決しようとしている。	①現代仮名遣いと歴史的仮名遣いとの違いに気付き、音読をする上での基本的な知識を理解している。範読を基に言葉のまとまりを捉えたり、簡単な歴史的仮名遣いの約束に照らしたりして、古文を正しく音読している。 ②古文と口語訳や脚注とを対応させながら読み、登場人物の行動や場面の情景等を（イメージ豊かに）思い描いて、内容のあらましを（的確に）捉えている。 ③古文と口語訳に抄訳された部分を読んで、古人のものの見方や考え方と自分や現代人のものの見方や考え方とを（具体例を挙げて）比較し、（共通点や相違点について）自分なりの感想をもっている。

5　指導と評価の計画

時	学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1 2	○「いろは歌」の大まかな意味をつかみ、音読して古文のリズムに慣れる。 ○「竹取物語」のあらすじをつかむ。 ○「竹取物語」の冒頭の範読を聞く。 ○現代仮名遣いと歴史的仮名遣いの違いを理解しながら、「竹取物語」の冒頭部分（古文）を音読練習する。 ○「竹取物語」の古文を、はっきりした発音で、意味のまとまりに区切って、大きな声で音読する。（一斉） ○暗唱に挑戦する。（個人）	・歴史的仮名遣い「ゐ」・「ゑ」等 ・七五調 ・「竹取物語」のあらすじ ・現代仮名遣いと歴史的仮名遣いの違い 〈用字上の違い〉 例：ゐ・ゑ・を→い・え・お 〈発音上の違い〉 例：は・ひ・ふ・へ・ほ→わ・い・う・え・お ・発音、意味を理解した区切り 例：さぬきのみやつこ／と／なむ／いひける ・現代と意味の違う言葉と注意する言葉 例：あやしがりて→不思議に思って ・係り結び　例：「なむ～ける」　・助詞の省略	アの① ・取組の様子や態度の観察 オの①② ・取組の様子や態度の観察 アの①　オの① ・音読チェックカード ※プレゼンテーションソフト使用
3 4	○「蓬莱の玉の枝」部分について、情景や人物の様子を想像しながら繰り返し音読し、内容を読み取る。	・歴史的仮名遣い・古文のリズム感 ・間の取り方、はっきりした発音等	アの①オの①② ・活動の観察 ・音読チェックカード
		（中略）	
5	○「かぐや姫」について感想を書く。	・古文、口語訳、解説文等の表現	・ワークシート
		（中略）	
6（本時）	○グループ内で話し合い、友達の意見を評価する。 ○「かぐや姫」の人物像を確認する。	・古文、口語訳、解説文等の表現	アの②　オの②③ ・ワークシート ・評価用紙
		（以下略）	

6　本時の学習指導　（本時６／７）

⑴　目標

・学習課題に積極的に取り組み、かぐや姫の人物像を捉えようとしている。　（関心・意欲・態度）

・口語訳を参考にしながら、古文からかぐや姫の心情を読み取り、人物像を捉えることができる。

（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

(2) 本時の展開

学習活動	学習内容	指導と評価の創意工夫
1 前時に書いた感想を交流する。	・かぐや姫の人物像 →「根拠となる表現」 ・やさしく、心清らかな人 →「～涙ながらに打ち明けた。」 ・美人を鼻にかけている →「輝くばかりに美しく～」「～ 一人ずつに難題を出した。」 ・冷たい人 → 「手紙をそえて残し～」…お世話になった翁たちを見捨てた？ 等	・自己評価用紙を用意する。
2 学習課題を確認する。	かぐや姫は「やさしく、心清らかな人」だったのか。それとも「美人を鼻にかけた冷たい人」だったのか。	・課題を明確に示す。
3 教科書掲載以外の部分（口語訳の載ったプリント）を使って、かぐや姫の言動を捉える。 4 グループに分かれ、各場面のかぐや姫の言動を捉える。 （個人→グループ） ⑴ワークシート（口語訳と古文） ⑵ グループで確認する。進行役 ⑶ 発表用シートに記録する。 記録係 ⑷ 発表の準備をする。発表者 ※口語訳や古文中の表現を根拠に発表する	【グループでの話合いの例】 司会「それでは話合いをします。自分で見付けた、かぐや姫の心情が表れている表現を発表してください。」 A「はい。ぼくは、口語訳の中の『以前にも申し上げようと思いましたが、きっと（月に帰ることを）お話ししたら動揺なさると思い黙って過ごしてきたのでございます』という表現に注目しました。ここは、かぐや姫が翁のことをとても大切に思っていることが分かる表現だと思うからです。古文で見ると、『先々も申さむ～』となっています。『心惑はし』という言葉の意味がよく分からないのですが、辞書で調べてみたいと思います。」 司会「Bさんはどうですか。」 B「わたしもAくんと同じ所に注目しました。ここから、かぐや姫は心の冷たい人物ではないことが分かると思うからです」 C「ちょっと待って。そこよりも、この後の、『どんなにお嘆きになるかと思うと悲しくて、この春先からずっと悩んでいたのです。』の方がかぐや姫の思いがよく出ていると思うな。そこは、……（以下略）」 ・グループ内での意見交換の仕方をワークシートで確認させる。 ・古文と口語訳の文章をプリントし、配布する。	
5 グループ代表の発表を聞く。 	・自分の意見 ・最後の最後のことまで心配している。月へ帰っても翁たちのことを忘れない。 ・翁たちと共に暮らしたいという気持ちが表れている。 ・翁たちの悲しみを理解する表現がある。 ・自分のことより翁たちのことを思っていることが分かる表現がある。	評価場面 〈学習活動に即した評価規準〉 アの② オの②③ 〈評価方法〉 ・ワークシート内容の考察 ・評価用紙内容の考察 〈手立て〉 規準に達しない生徒 ・かぐや姫の「美人を鼻にかけた」「冷たい」面を否定する表現に着目させる。 ・口語訳に着目させる。 規準に達している生徒 ・かぐや姫の言動を、複数の表現を重ね合わせることで多面的に捉えさせる。 ・発表に向け、内容を整理させる。
6 かぐや姫の人物像を確認する。	以上を根拠に かぐや姫は「美人を鼻にかけた冷たい人」とは言い切れない。 かぐや姫が魅力的なのは「やさしさ」等も含めて人間らしい感情をもっていたからだ。	
7 教師の話を聞く。		

参考資料： 竹取物語（全）（角川ソフィア文庫―ビギナーズ・クラシックス）

事例５　学校図書館の活用の充実 「Ｃ　読むこと」を中心とした指導事例（第１～３学年）

ここでは、３年間を見通して、学校図書館の活用を図りながら、読書と情報活用の力を身に付けさせる指導事例を示した。学習指導要領「Ｃ　読むこと」に「読書と情報活用」の指導事項が新設され、目的に応じて本や文章等を選んで読んだり、それらを活用して自分の考えを記述したりすることが重要視されている。

本事例は、他領域との関連を密にし、話したり書いたりする活動を通して読みを深めることをねらいとしたものである。また、自分たちの手で、学校図書館をつくりあげるという活動目標をもたせることで、生徒の意欲の喚起を図った。

〈３年間を見通した活動計画の一例〉

３年間の見通しを確認し、自分たちの学校図書館を手づくりするイメージをもたせる。

１年生	➡	２年生	➡	３年生
「本の帯」をつくる		「ポップ」をつくる		本紹介の「コーナー」をつくる

〈第１学年の実践例〉

１　単元名・教材名　　本の帯をつくろう

２　単元の目標

⑴　学校図書館の中から自分の好きな本を選び、積極的に「本の帯」を作成しようとしている。　（関心・意欲・態度）

⑵　本や文章等から必要な情報を集めるための方法を身に付け、情報を的確に帯にまとめることができる。　（読むこと）

⑶　言葉の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意し、言葉を使い分けることができる。

（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

３　学習指導の実際

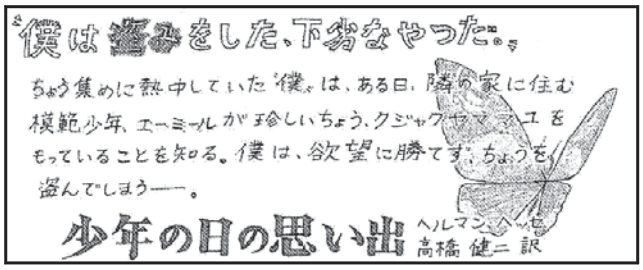
⑴　単元の導入段階で、「本の帯」を作成することを伝える。

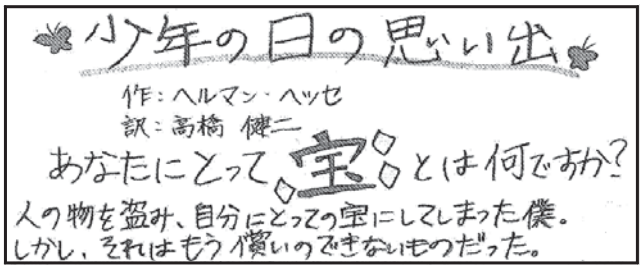
⑵　「少年の日の思い出」の内容を踏まえて、「本の帯」を作成する。

【作成のポイント】

・作品の中の印象に残った言葉や情景を整理する。
・作品のクライマックスの場面を用いる。(引用文・要約文)
・本の帯を読む人の立場になって、手に取ってみたくなる表現(キャッチコピー)を考える。等

⑶　クラスごとに相互評価をする。それぞれの作品の引用文や要約文、キャッチコピーなどについて、よいところを指摘し合う。





【コメント例】

「僕は盗みをした下劣なやつだ」という台詞には主人公の思いが込められていると思う。

作品のあらすじをうまくまとめている。続きを知りたくなる表現だ。

「宝」という言葉をキーワードにしている。問いかける表現が効果的だった。

⑷　前時までの学習を生かし、図書室の本の中から新一年生にお薦めの本を選び、「本の帯」をつくる

⑸　作成した「本の帯」は、実際に図書室の本に付けて展示する。

〈第２学年の実践例〉

１　単元名・教材名　　本のポップをつくろう

２　単元の目標

⑴　友達の作成した「ポップ」の表現を参考にしようとしている。（関心・意欲・態度）

⑵　ポップの特徴を理解し、ポップづくりに必要な情報を本や文章等から取り出し、自分の考えをまとめることができる。（読むこと）

⑶　抽象的な概念を表す語句や多義的な意味を表す語句等について理解し、表現することができる。（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

地域の書店から「ポップ」を借りて、実物を参考にしながら説明することも効果的である。

３　学習指導の実際

⑴　ポップについて説明したあと、ポップづくりの時期を知らせ、前もって図書室の本を５冊以上を目標に借り、その中から１冊選んでポップをつくる。

１年生での帯づくりを想起し、効果的な引用文や要約文、キャッチコピーを作成するには、確実な読みが大切であることを確認させる。

⑵　作品は全学級分を図書室に展示し、相互評価する。先生方や図書整理員の方にも見てもらい、先生方のコメントを付ける。

【「ポップ」作品例】

〈第３学年の実践例〉

１　単元名・教材名　　３年生お薦め『うもれた名作コーナー』をつくろう

２　単元の目標

⑴　学校図書館を活用し、進んで幅広い分野の本を読もうとしている。（関心・意欲・態度）

⑵　本や文章等から得た知識や自分の考え等を、プレゼンテーションを通して深めることができる。（読むこと）

⑶　和語・漢語・外来語等の特徴を理解するとともに、効果的に使い分けることができる。（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

３　学習指導の実際

⑴　プレゼンテーションについて説明したあと、実施時期を知らせ、前もって図書室の本を５冊以上借り、その中から１冊選ぶよう指示する。

今までの読書生活を振り返らせ、新たな読書の視点として、学校図書館でほとんど借りられていない「名作」に目を向けさせたい。

⑵　読んだ本の内容を整理し、学級内でプレゼンテーションをする原稿を作成する。➡ プレゼンテーションの実施

⑶　プレゼンテーション終了後、投票を行い、どの本を一番読みたくなったか、クラスごとに「ベスト５」を決定する。各クラスで自分の本が選ばれた20人（学年合計）は、後輩の１年生と先生方の前で再度プレゼンテーションをする。選ばれた作品は、図書室にまとめて展示し、「３年生お薦め『うもれた名作コーナー』」として、紹介する。

【プレゼンテーションの原稿例】

私は、『大きな木』という絵本を紹介します。【本を掲げる】
皆さんは、この表紙からどんな内容を想像しますか？【表紙を広げて見せる】
私は、この緑色のきれいな表紙と作者のシェル・シルヴァスタインさんの写真に強いインパクトを感じ、読んだのですが、とても印象に残る本となりました。この絵本は、木と少年の会話のやりとりが続きます。少年は、次々に木に要求します。木は少年が望むことを何でもかなえました。少年がどれほど自分勝手なお願いをしても木は満足なのです。〈中略〉
皆さんも、この絵本を読むときっと温かい気持ちになると思います。ぜひ、読んでみてください。

事例６　書写の指導の充実　「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」（書写）の指導事例（第１学年）

ここでは、ＩＣＴの効果的な活用を通して、行書特有の運筆とリズムを意識させる指導事例を示す。書写の指導については、文字文化に親しみ、社会生活や学習活動に役立つよう内容や指導の在り方の改善を図るとともに、身の回りの文字に関心をもち文字を効果的に書くように指導することが必要である。

本事例においては、ＩＣＴを効果的に活用し、段階的な学習活動を設定することで、生徒の毛筆学習に対する意欲を高める工夫を行った。

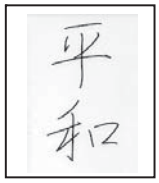
１　単元名・教材名　　行書に慣れよう

２　単元の目標

⑴　行書の特徴に気付き、自ら進んで行書に慣れようとしている。　（関心・意欲・態度）

⑵　漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くことができる。　（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

３　指導と評価の計画　（全５時間）

時	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1	○「かご書き」による練習 ・半紙の大きさに拡大コピーした教科書の手本の上に半紙をのせ、鉛筆、あるいは小筆で字の周りをなぞる。 ・字が交わるところも書く。 ・できたら手本を外し、墨がついた筆で練習する。	○筆の持ち方、姿勢 ○正しい運筆 ○文字の構成、配置、バランス 一画ごとの線の太さの視覚的な理解から、力の入れ具合を調節できるような体験的な理解へと促す効果も期待できる。	○一画一画の太さ　向きを意識している。 ・半紙に書かれた作品
2	○「ほね書き」による練習 ・手本の上から一画の中心の線だけを鉛筆、あるいは小筆で書く。 ・文字の運筆、一点一画の太さなどを思い出しながら、線をなぞっていく。	○文字の構成、配置、バランス  「かご書き」で学んだ行書の特徴を、一画一画の中心線の上で表現する。	○一画一画の太さや向きを意識しながらほね書きをしている。
3 4 （本時）	○書いている様子を動画として撮影し合い、客観的に分析する。 ・動画を見ながら、自分の運筆を振り返る。 ・上級者の運筆のポイントを聞く。	○姿勢 ○運筆の速さ、力の入れ具合 ○点画の始筆、終筆方向、長さ、	○客観的に分析している。 ○分かりやすい言葉で伝えている。
5	○爪書き（指書き）、折り目をつけての練習 ・だいだいの字形を爪（指）で半紙に跡をつけて、その上をなぞる。 ・手本、半紙に中心線などの折り目をつける。 ・折り目だけを頼りに練習をする。	○文字と文字との間の空け方 ○文字の中心の取り方	○折り目などを頼りに文字を書いている。 ・半紙に書かれた作品

４　学習指導の実際（第３、４時）

＜動画の分析について＞

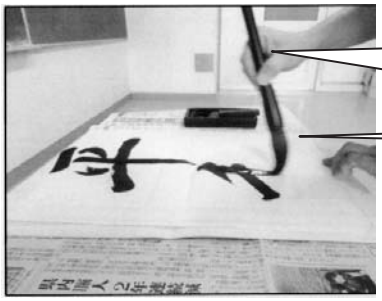
デジタルカメラ等の動画撮影機能を使って撮影をする。その後、自己の筆の運びを客観的に分析してみたり、友達の筆運びとの違いを見比べたりする。

また、上級者の行書の一連の動きをテレビやプロジェクター等を使って映し出し、上級者自身に説明をしてもらう。そこでの気付きや学びを皆で共有し、自分の筆運びや力の入れ具合などの改善に生かしていく。

方法①　自分が行書を書く映像を友達に撮ってもらい、その動画を見て自己分析をする。
方法②　自分と友達との運筆の違いを見比べて分析する。
方法③　上級者が行書を書く映像を、上級者自身が説明する。

分析の観点として、次のようなものが挙げられる。

分析の観点（例）
①始筆　②点画の形、長さ、方向　③点画の曲線化　④点画の連続性　⑤点画の省略　⑥終筆
⑦筆の持ち方　⑧穂先　⑨力の入れ具合　⑩運筆のリズム　⑪書くときの視線

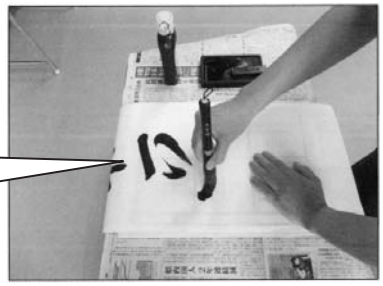


映像を見ての気付き

筆を上下させないで一気に書いているね。
少し筆を奥に倒して書いているのが分かる。

穂先は全体の４分の１くらいしか使っていないんだね。

上級者の説明



自分が意識しているのは、筆の流れとリズムです。
筆の運び方のリズムは、「スー、スッ、スゥッ」って感じで書いています。（はらいなど）最後の所は、特に穂先に神経を集中して書きます。

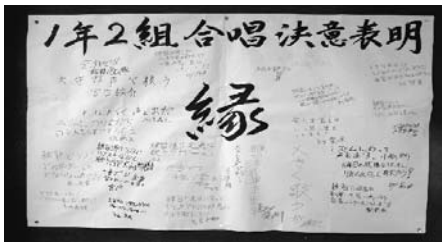
５　指導上の留意点

撮影する位置にも工夫が必要である。上や横から撮影したり、書き手の目線から撮影したり、どの角度から撮影したら、より効果的に運筆の特徴が分かりやすいか、それぞれで異なる。書く文字によっても違いが出てくる可能性があるので、教師の助言が必要になる。

補充・発展・関連指導

１　「四字熟語カレンダーをつくろう。」

授業で「四字熟語」を学習した後に実施する実践例。自分の好きな「四字熟語」を決めて、その文字を毛筆で行書を意識して書く。日付、名前、四字熟語を書き入れてカレンダー形式として掲示する。【行事に向けた掲示物】



２　行書を掲示物に生かそう。

書写の時間に学習した行書を、生活の場で生かす実践例。
行事に向けた掲示物の中心の文字を行書で表現する。

３　「行書に慣れよう。（硬筆編）」～「硬筆展」から発展させて～

楷書の手本を行書に直し、「なぞり書き」をさせて行書に慣れさせる実践例。中学１年生では硬筆展に向けて、手本を楷書で書く。その手本をコンピューターで行書に書き換え、文字を薄くしてなぞらせる。楷書から行書へ移行していく際に、それぞれの書体の違いについて気付かせたい。

４　視写～「文字を正しく整えて速く書く」を目標にして～

「正しく整えて書く」力を土台にしながら、「正しく整えて速く書く」力を身に付けることを視野に入れた実践例。視写学習を授業の一部（帯単元）として取り入れる。書写のねらいである「文字を正しく整えて速く書く」を目標にした指導である。また、めあてを明確にすることで、全員が学習活動に集中できる。

(1)原稿用紙に書かれた手本を視写する。
(2)視写教材を活用する。
(3)新聞のコラムを視写する。

これらは、「言葉のまとまりを覚えて写すこと」を意識させる。
また、マス目のあるノートを使用することで、極端な字の崩れを防ぎ、文字間のバランスも整えて書くことができる。

【新聞のコラム視写】